

I. 令和6年度の運営総括及び来期の課題

今年度は開館10周年を無事に迎えることができ、節目の年だった。

小学生、中高生の利用が増加。反面、幼児の利用が減少した。

昨年同様、移動児童館では地域のまつりやイベント、学童クラブに出向き児童館を知ってもらい、その出会いにより来館に繋げることが出来た。小学校の親子行事へも出向き、児童館での遊びを体験してもらった。

定期的に日中一人で来館し、溜まった思いを話す母親。第2子の出産を控えて産後の兄を心配し不安になる母親。こどもの病気を打ち明けてくれる母親。それらを受け止め、利用者一人ひとりの気持ちに寄り添いながら関係性を大切にし、こどもも大人も安心できる『居場所・心の避難所』を掲げてきたことが今に繋がっていると感じる。

今後も利用者のニーズに応じた内容を、職員一丸となり考え提供していきたい。

1. 乳幼児・保護者向け事業

(1) 総括

これまで定例行事で行ってきた幼児の誕生会を見直し、誕生月であればいつでも誕生日カードをプレゼントする『毎日が誕生日』を企画・実施。平日に来館できない保護者に喜ばれ親子、兄弟とのツーショット写真と手形や足形を押したカードのプレゼントに笑顔がこぼれていた。季節の工作では、子育て講座等で親しくなった母親達が連れだって来館し、年間通して制作を楽しむ姿が見られた。

幼児と保護者が身体を動かして安心して遊べるように遊戯室を開放した『ちびっこらんど』は職員手作りの遊具や寄付でいただいたトランポリンが加わり、来館する親子が増えている。また、『幼児タイム』として土日午前中の一部の時間を遊戯室が優先的に利用できる時間帯を設けたことで、休日ゆっくりと来館し、親子で追いかっこやボール遊びなどの元気な声が響いていた。

夏場は、施設を生かし屋根付きの職員玄関前で『ちびっこらんど 水遊び』を企画。直射日光を避け水遊びができると保護者（特に母親）には好評で保護者同士おしゃべりを楽しみながら、こども達を遊ばせていた。

子育てオーエンジャー☆みなみとの共催では、日頃の子育てから一時でも解放されリラックスした時間を持って欲しいと『ハンドトリートメント&ピアノ演奏』をお願いした。また、クリスマスイベントの『えほんとクリスマス遊び』ではピアノ演奏に合わせて身体を動かしたり、絵本の読み聞かせやふれあい遊びを楽しんだりして幼児親子が楽しそうに参加していた。ふれあい遊びを知らない母親が多く、幼少期の親子の絆を深める昔ながらのわらべうた、ふれあい遊びなども、提供していきたい。

年間3回実施の『0円バザー』は回を重ねる毎に寄付が集まり、引き取りも沢山の保護者、小学生で賑わった。お気に入りの品を引き取った方の中にはご自身も寄付してくださり、優しさの循環が垣間見えた。今後も継続し笑顔を増やしていきたい。

(2) 課題

昨年度よりも幼児の利用が減少したのは、少子化の影響が否めない。当館は立地的に買い物ついでに寄れる場所ではないが、1組で来館しても職員と話をしたり、親子だけで遊んだりと気軽に立寄れる居場所となっていると感じる。半面友達づくりを目的として来館する利用者にとっては物足りなさがあるように思う。『ママ友アプリ』を利用する保護者も増えていると聞く。安心して友人関係を築けるような居場所となるため、利用者のニーズを知り魅力ある企画を提供し、癒しの場にしていきたい。

2. 小学生事業

(1) 総括

児童館に併設されている放課後児童クラブ『茨っこクラブ』の小学生が平日の大半を利用。そのため一緒に遊ぶ目的で保護者の送迎や徒歩、自転車で利用する常連の小学生が来館し賑やかに過ごしている。ケンカや仲間外れなどのトラブルに加え最近では『あおり』と呼ばれる挑発行為や時に応援もその一つと捉えられ、日常的にこども達は『あおってきた』と支援員さんや職員に訴えている。その都度、個々の話を聴き、受け止め、こども達自身で解決できるように支援員さんと共に支援をしている。

児童館は出会いの場でもある。地域の小学校は少人数で小さいコミュニティである。そのため区内外から利用する小学生達との出会いや交流は、社会性や思いやりの心、そして遊びの中での充実感や達成感は心身の成長に大きく関わっていると感じる。

定例行事として今年度から有志の小学生による『なかよしくらぶ』を企画・実施。こども達で名称を決め、やりたいこと、思いを形にした内容で行っている。地域の敬老会での手話合唱やハンドベルの演奏も堂々としたものだった。楽しいと感じることだけではなく、失敗体験も大切な成長として職員は見守ってきた。

『遊戯室タイム』『小学生誕生会』『季節の工作』などを昨年同様行った。その中で『小学生誕生会』は3か月毎に年間4回の実施だったが、此方が思う以上にこども達が楽しみにしてくれていたことに驚き、また喜びだった。何か月も前から気になり話してくる子や、自分の誕生月が終わり余韻に浸る子など。主役側・祝う側の参加する姿勢の変化が感じられ『成長』を感じたイベントだった。

その他行事として『スポーツ大会（ドッジボール・ドッジビー）』『夏休み工作』『ハロウィン』『防犯講習会』等運動、創作、季節感、防犯意識を重視し子ども達の主体性を大切にしながら行った。

『スポーツ検定』では、小学生女子の要望で『フラフープ検定』を新設。1日で全てに合格した子が多く、新たな検定内容を検討している。

昨年に続き『南区4館合同ドッジボール大会』を白根児童センターで行った。1～3年生低学年の部、4～6年高学年の部とも惜しくも準優勝であったがこども達はチームで力を合わせて戦ったことで、負けてしまっても楽しかったと感想を述べていた。こうした経験を積み、レジリエンスを鍛える一端となって欲しい。

（2）課題

昨年度の課題であった、庄瀬・新飯田地域の小学生の利用増加について、今年度は半歩前進し、移動児童館でのイベントのPRにより庄瀬地域の小学生の利用が見られた。また新飯田地域の放課後児童クラブ『げんキッズ』は、夏休みの期間、福祉バスを利用し数回来館し、他校の小学生との交流を楽しんでいた。その後も継続し利用する子も僅かではあるが増えている。

以前のように3地域の交流が児童館であれば、中学校へ進学した際の友人関係がスムーズにいくのではないかと考える。そのため庄瀬・新飯田の小学生を呼び込むため積極的なアプローチをしていきたい。

3. 中高生事業

(1) 総括

今年度も白南中学校の2年生2名を職場体験で受け入れた。中学校に入学してからも利用してくれている常連の男子2名だった。2人で遊びの企画・実行。笑いも取りながら見事に場を盛り上げ、参加の小学生は大喜びだった。彼等の成長を感じ、またその後ろ姿を小学生達が追ってくれることを願った。

平日の学校終わりに水分補給やトイレを借りに寄り、職員とおしゃべりをしたり土日に勉強道具を持ち、勉強をしたりする様子も見られたが大概是、中学生、高校生に小学生も加わり利用し、得意なバスケットボール、サッカーで汗を流していた。サッカー検定がないことを指摘され、内容の相談をすると早速素案を作り、職員と相談しながら『サッカー検定』が誕生。直ぐにまとめて掲示した所、満足そうに眺め、自らも挑戦していた。その他、高校入学を機に再び児童館を利用してくれるようになった高校生の存在も大きかった。小学生達の人気者。運動が得意で指導も上手く、何でも付き合ってくれる優しいお兄さん。ケンカの仲裁も得意で頼りになる存在だ。そんな彼も小学生が居ない所では、職員に現状報告や思いを打ち明ける。彼にとっても児童館は大事な居場所となっていると実感する。

(2) 課題

南区4館の中で一番中高生の利用が少ない館である。立地も関係しているが、利用促進のため『中高生タイム』を定めても、そこを目掛けての来館がなかった。そのため来館時は優先していつもよりも長めの利用で対応していた。今後は中高生や小学校高学年の要望を聞き、『高学年・中高生タイム』として実施をしていきたい。

現在中学校では、不登校や不登校予備軍が増えていると児童館運営協議会で話が出ていた。児童館を居場所にしてもらうため、ボランティアの募集や工作準備の手伝いなどの協力を中学校の地域コーディネーターと連携し、広く募集していきたい。『地域の居場所』としてふらっと立ち寄れ、気兼ねなく過ごせる時間を提供したい。

4. 地域との協同事業

(1) 総括

茨曾根地域の『地域の茶の間「五九朗会」』の畑で農業体験など、地域との共催事業を今年度も行うことができた。

茨曾根地域敬老会において『なかよしくらぶ』の小学生によるハンドベルと手話合唱の発表を行った。全員揃っての練習がなかなか出来ず本番を迎えたが、全員堂々と曲紹介や演奏をし、引率の職員を驚かせていた。会場のお年寄りに大きな拍手をいただき自信に繋がる貴重な体験ができた。

農業体験では、さつま芋の収穫作業を実施。地域のお年寄りより『畑の先生』となって手取り足取りご指導いただいた。既に収穫済の熟成されたお芋の試食やしゃぼん玉遊びなど、こども達が喜ぶ内容を考えてくださり大変ありがたかった。世代間交流を今後も継続して実施していきたい。

その他、コミュニティ茨曾根との共催ではイベントの広報と受付を担当し新飯田地域のボランティア団体『ふおう♡はあと』のイベントの広報も行った。

児童館内では、コミュニティ茨曾根 子供部会との共催で『よさこい体験会』の掲示と受付を行った。来年度は本格的に『よさこい教室』を実施する予定となっている。

(2) 課題

地域との共催は、茨曾根地域に偏り庄瀬・新飯田地域は移動児童館での関わりが主だったものとなっている。児童館は18歳未満のこどもを対象としていることでお年寄りとの関わりを児童館職員が行うことには無理があるため、今後はこども達を交えた交流を考えていきたい。例えば地域の高齢者施設へ小学生との訪問を検討していきたい。

5. 移動児童館

(1) 総括

今年度も各地域より声を掛けていただき、まつりやイベントを中心に茨曾根地域 3 回、庄瀬地域 5 回、新飯田地域 5 回の合計 13 回の移動児童館を実施した。

職員の顔を覚えてもらうため、偏りなく全員で伺い『ニックネームで呼んでください』とお伝えしたところ、親しみやすさから気軽に声を掛けてもらえた。また、コロナ以前に実施していた小学校への移動児童館も、今年度は 1 校だったが実施することができた。親子で協力して同じものを作る楽しみを共有出来て、参加の保護者からは『大人の方が夢中になり、もっとやりたかった』と喜ばしい感想をいただいた。

また、移動児童館で児童館イベントの PR を行ったことで、そこから来館に繋がり、誘った友人が家族と一緒に利用する。そんなよい循環が生まれている。

まだ児童館の認知がされていないことも多く、今後も移動児童館で伝えていきたい。

(2) 課題

地域のまつりやイベントは毎年実施が決まっており、移動児童館の認知を広めるため、小学校の学年行事や地域こども会での実施を検討したい。そしてそこから児童館への来館に繋げていきたい。

親子で児童館の遊びを楽しんでいただけるよう、職員のレベルアップのため研修や学びの機会を積極的に受け、今後も地域と協力連携していきたい。